第２回持続可能な歩いて暮らせる新しいまちづくりセミナー

１　日時

平成１９年１月３０日（火）１３時３０分～１５時４０分

２　場所

郡山市市民プラザ７階大会議室

３　内容

（１）講演『社会実験の結果と今後のまちづくりについて』

講師：日本大学工学部助教授　土方吉雄　氏

○　別紙レジメ「社会実験の結果と今後のまちづくりについて」に基づき説明。

（２）パネルディスカッション『郡山市の中心市街地におけるまちづくりについて』

コーディネーター：日本大学工学部助教授　土方吉雄　氏

パネリスト：伊藤　和　氏

（街こおりやま編集長、歩いて暮らせるまちづくり郡山地区社会実験運営委員会 委員）

鎌田　真理子　氏

（いわき明星大学人文学部助教授、持続可能な歩いて暮らせる新しいまちづくり検討委員会 委員）

次田　喜正　氏

（郡山市商店街連合会商店街きらめき２１研究会 会長）

松田　信三　氏

（郡山市商工労政部商工振興課 主任主査兼商業振興係長）

【コーディネーター】

○　各パネリストには、社会実験に参加した感想と、社会実験の結果を踏まえた今後のまちづくりに関する意見をお願いする。

【パネリスト】

○　昨年の１１月３日、４日、５日（社会実験の第２クール期間中）に、郡山の農業青年会議所と自分がやっているくわね会が一緒になり青空市場に参加した。

○　結果報告のアンケート調査では、来街者の中でまた来たいという人が９８％、参加者でまた出店したいという回答が５０％を超えており、評価が高かった。

○　青空市場で郡山産の美味しい野菜の物販、食の提案、郡山の特産品づくり（御前

人参、冬甘菜というキャベツ）という３つのことに取組み、御前人参のジュースの提供や冬甘菜の試食もしていただいた。

○　３日間ということで、どのくらいの人が来るかわからず、例えば御前人参用のジュース用のコップを 1,000 個用意した。うれしい誤算で、初日１１月３日に 800 杯、二日目は 600 杯、最終日は 1,200 杯出た。これは無料の提供だったが好評だった。

○　食の提案については、ジャガイモとサツマイモの食べ比べをしてもらった。普通一般家庭では、ジャガイモをみそ汁の具、カレーライス等に使うわけだが、ジャガイモを買う時に、男爵イモ一品種しか買わず、それで全部の料理を作ってしまう。

○　我々の提案は、料理に合った食材を使えば、もっと料理はおいしく作ることができるということ。農家では、人が買ってくれる食材でないと作らない。ところが、男爵イモだけで全ての料理を作ってしまうと、いろいろな品種のイモが売れないので、結果として農家が作らなくなってしまう。

○　料理をする人も料理が楽しいと思ってもらうために、素材の美味しさを知ってもらいたいと思い、食の提案をした。これも大変好評で、イモを蒸かして提供したが、イモを蒸かすのが間に合わないほど大盛況だった。

○　社会実験に参加して感じことは、楽しい催しがあれば人が来るということ。やっている人が無愛想では駄目。これを個店に例えると、うちの店は楽しい店だから来てみてと宣伝できればいいと思う。ぶすっとしていれば客は来ない。

○　キャベツを買っていった人が美味しいということでまた来てくれたが、社会実験の最終日に、買い物客から、明日からどこに買い物に行けばいいのかという声が多く寄せられた。

○　郡山の良さを街なかで知ってもらうためには、アンテナショップや常設市場など、街の活性化のために街の真ん中に市場をつくるのが一番いいというのが青空市場を出店して感じた。

【パネリスト】

○　専門は社会福祉学ということで、新しいまちづくり検討委員会の委員を務めている。

○　今日は会場を間違えてビッグパレットに行ってしまったので、そこに車を止めて、タクシーで会場まで来た。タクシーの運転手に社会実験の感想を聞いたところ、非常に良かったと言っていた。一人の意見を聞いて全てを評価するわけではないが、渋滞の原因だったタクシープールの問題が解消されたとして、社会実験に対する評価が高かったようだ。

○　社会実験との関わりについてだが、11 月 3 日に社会実験の現地視察を行った。

○　社会実験に対する印象は、関わった人の苦労もあり、メニューも多種多様で概ね

好評だったと言える。

○　専門の社会福祉の視点では、キッズサロンの取組みが評価できる。子供連れの家族をターゲットとしたキッズサロンは、休憩や授乳等をすることができ、非常に良い取組みであり、今までのまちづくりに欠けていた視点であった。

○　一方で、高齢者、障がい者が気軽に来られるような配慮が足りなかったのではないだろうか。街なか循環の小型バスも車椅子の方には乗りづらかったように思う。

○　講演の中で、1990 年ぐらいからサスティナブルシティの取組みが全世界的に起こったという紹介があったが、同じ時期である 1990 年にユニバーサルデザインが提唱され、アメリカのノースカロライナ大学にユニバーサルデザイン研究所が開設された。日本には 1992 年にユニバーサルデザインが入ってきたと言われている。このユニバーサルデザインは万人にとって使われ易い社会づくりと言われているが、参議院の提唱では、万人に使い易い社会、ユニバーサル社会という言葉も生まれている。

○　アクセスできない人を作り出してはいけないと思う。様々な人のタウンモビリティを確保する必要がある。今回の社会実験では移動困難者に対する視点が欠けていたのではないだろうか。

○　しかし、街なかを歩いていて、自閉症らしき子供が楽しそうに街なかを歩いていて、賑わいのある街の中にいろいろな人が出てきて楽しめるのがユニバーサルな社会なのかなという印象を持った。

○　山形県が行った平成 15 年の土地利用に関する意識調査では、今後優先すべき施策として、1 位が賑わいのある商店街等、中心市街地の活性化、2 位が高齢者・障がい者に優しいまちづくりであった。また、商業地のあり方についての調査では、41%の人が身近に買い物が出来る商店街が必要である、という意見で最も多かった。また 35%の人が中心市街地の再開発と活性化が大切と回答している。この結果は、いろいろな地方都市で共通する市民の要望と推測できる。

○　気がついた点として、講演の中でも触れられていたが、ヨーロッパ、アメリカでカウンシルを打ち立てて、住民の評議委員会を中心にまちづくりを行っているということだが、日本では一番欠けていると思った。ただし、今回の社会実験では、住民の方をはじめ商工会議所が中心になったと聞いており、その点も評価できる。

○　学術的な話になってしまうが、すでに亡くなってしまったが、ロンドン大学ウィリアム・ロブソンの「福祉国家と福祉社会」という本の中で、中央集権的な国家が政策を国民に提示するだけでは国民は評議を失ってしまうと言っている。

○　重要なことは、住民が主体的に、草の根的に作り上げていくということであり、すでに市民の公益活動が世界の潮流となっているが、いかに一般の人を取り込んでいくかというのが大きなポイントになってくる。

【パネリスト】

○　社会実験との関わりについては、きらめき２１研究会で、まちなか探検マップを作成した。このマップは、夏の暑い時期、お盆休みを返上して、商店街と行政が一緒になって商店街を駈けずり回って郡山の魅力、郡山の面白い場所、小道を探して歩いて作った。

○　このマップの作成を通じて、まちづくりをしていく上で、行政とうまくコミュニケーションを図ることが重要だということを感じた。しかし、行政とコミュニケーションを取りましょうと言ってもなかなか難しい。

○　行政とコミュニケーションを図るためには、現在、県でも市でも、行政で公募委員を募集しているので、その中に積極的に参加し、自分たちの商店街や中心市街地の問題だけをぶつけるのではなく、農業問題、過疎化の問題等、行政と一緒になって幅広く問題意識を持ちながら、話し合い、助け合いながらやることが大事だと思う。

○　本日のセミナーは日程が月末で非常に厳しい。ほぼ午後いっぱい取られてしまい、商売をしている者にとっては困ってしまう。通常、このようなイベントをする場合には、その後にどういう流れがあるのか、１つ１つのイベントにもストーリー性があるべきだと思う。夕方に集まってもらって、帰りに飲みに行ってもらうといった、ストーリーを作ることによってイベントに相乗効果が出て、街の活性化につながる。

○　社会実験の全体的な感想としては、個人的には非常に楽しく参加させてもらった。自分が商売をしている所は、ここから 10 分ぐらいの本町という所だが、街なか循環バスのバス停にもなり、商工会議所の世界ベンチ椅子コンテストのベンチも置いてもらった。

○　自分には 3 歳の子と 8 ヶ月の子がいるが、キッズサロンは非常に良い施設だった。子供を持つ親としては、中心市街地に住んでいながら、中心市街地に買い物に行きたくない。それは、子供のトイレがない、遊ばせる所がない、まして自分が子供を預けられた時に時間を潰す場所がないからだ。福島市にあるコムコムには子供にせがまれてよく行くが、子供をターゲットにした面白い施設が中心市街地にあれば、親も行かざるを得ないし、お菓子も買わざるを得ない。さらに、滞在時間が長くなれば食事をして帰ろう、野菜を買って帰ろうとなる。

【パネリスト】

○　市では主に賑わい系の社会実験、特に街なかの青空市場、ファッションショー、キッズサロン、その他に足湯やふれあい科学館の協力を得て街なか科学館などにも携わった。

○　社会実験は第 1 クールは 9 月 23 日から 10 月 15 日まで、第 2 クールは 10 月 28 日～11 月 5 日の合計 32 日間だったわけだが、その全ての土日祝日に街なかを青空

市場で埋め尽くそうということで準備を進めてきたわけだが、第 1 クールの最初の時期が米の収穫時期と重なり、農家にとっては最も忙しい時期であったため、出店したくても出られないという店が多く、あちこち駈けずり回りながら出店者を探し、市内の直売所や、国交省の道の駅、商工会等の協力を得て、最終的には 26 団体・個人に参加いただき、なんとか青空市場をやっていけた。

○　社会実験の実施前に、高齢者や女性、学生を対象に街なかに欲しい物ということでアンケートをとった時、主婦や高齢者の方から地場野菜の直売所を街なかに欲しいという意見が第 1 位であった。また、社会実験運営委員会の委員から周辺部の新鮮な野菜を街なかで売って欲しいという意見を受けて青空市場を出したので、来街者アンケートでもまた来たいという回答が 9 割という高評価につながった。

○　一方、青空市場の出店者側からの意向として、また参加したいという回答は 4 割程度に止まった。これは、場所、経費、時間等、いろいろな問題がある。問題解決に向けて、商店街や郡山農業青年会議所など関係機関から協力をいただきながら、街なかの直売所を考えていかなければならないと思う。

○　キッズサロンは、商店街の中にある空き店舗を活用して設置し、運営は市内のＮＰＯに協力してもらった。社会実験期間中はキッズサロンを開放していたが、費用等の問題で、10 日間のみＮＰＯに常駐してもらった。預かり保育までは出来なかったが、大変好評だった。

○　実験の準備に携わった職員も充実感があったと思う。商工振興という部分で、行政マンが街なかに出て、お店の方から意見をもらうのも重要だと感じた。また、イベントをやっている商店街の方には頭が下がる思いがした。準備、手続きなど難しさを実感した。

【コーディネーター】

○　社会実験では好評のメニューが数多くあったようだ。

○　松田氏から準備が大変だったという話があったが、社会実験のメニューを継続する方法、どうしていけばいいのか、意見を伺いたい。

【パネリスト】

○　青空市場では、道路使用の手続きが大変だと思う。また、手続きが出来たとしても、出店者の道路使用許可の手数料は一律 2,200 円と決まっており、大根 1 本 100 円ぐらいなので、なかなか儲けを出すのが難しい。出てきたからにはある程度儲けてもらいたいと思うが、難しい。

○　また、出店者には、途中で売り切れてしまった場合は仕方がないが、11 時～16 時の 5 時間、店を出すようにお願いした。しかし、農家の方に伺ってみると、ほとんどの方が短い時間に効率的に売りたいと考えている。市内でも朝市、夕市をあち

こちやっているが、2 時間～3 時間が限界のようだ。

○　現在、商店街でやっているイベントの中で、毎月なり、3 ヶ月ごとに、特産品、農産品のコーナーを設けることから始めてもらえればいいと思う。

○　将来的には、個人的な意見になるが、街なか全体で市場的なものが出来れば面白いと考えている。

【コーディネーター】

○　同じく、社会実験メニューの継続について意見を伺いたい。

【パネリスト】

○　街なか探検マップでは、子育て支援のための施設、観光客用のホテル、地域の人のために病院等を盛り込んだが、補助金の関係で個店をのせられなかった。今後は個店ものせて、生きた地図にしていきたい。そのためには、お金を出す行政が柔軟になってもらいたい。商店街の方も、行政と仲良くなって、考えを伝えていく必要がある。

○　商店街のことなら商店街で金を出してやってくださいと言われても、なかなか動けない。呼び水となる行政からの支援があれば、商店街の息も吹き返すと思う。そのための施策として、今後も社会実験などの施策が必要だ。

【パネリスト】

○　社会実験で好評だったメニューをどのように継続していくかということだが、まず、個人でも参加する、組織としても参加できる、という運営組織体を行政が支援するのが基本だと思う。そこには法人格をとった継続的な取り組みが出来る強力な運営主体づくりをし、そこに任せていく。

○　昨年、県主催の欧州視察に参加し、サスティナブルシティの成功事例を視察した。その視察で、相手方の担当者の話の中で、自分達の住む場所にプライドを持つことが大事だということだった。これは、建造物、文化、歴史など様々なものにプライドを持つということが考えられるが、日本の中でプライドを持つというのは非常に難しく、京都など限られた所かなと思いがちだが、伊藤氏の話の中で、郡山の特産品づくりという話もあり、食文化も大切だし、これから残していかなければならない。昭和 1 ケタ世代の人が亡くなったならば、伝統食は次の世代に継承されない。

○　ヨーロッパを歩いて感じたことは、市民が自らまちづくりに参画する意識が高いということだ。継続的な取組が出来る運営主体が出来れば、今後寄付文化も生まれてくると思う。現在も、財産争いをするぐらいなら市に寄付するという人も出てきている。市民をいかに取り込んでいくかが大事だと思う。

【パネリスト】

○　社会実験に参加し、駅前大通りを整備した結果、道路は確かに美しくなったという実感があった。しかし、郡山の街なかには公共施設が一つもないということを改めて感じた。例えば、周辺の安積町や中田町には、公共施設があるが、街なかの駅前大通り、なかまち夢通り、大町通り、さくら通りと、郡山の街なかには、市民が気楽に利用できる施設が皆無だ。公共施設は街なかに必要であり、公共施設があると人は来る。

○　昭和 55 年頃、なかまち夢通りで通行量調査をすると 5､6 万人ぐらいだったが、現在は 3 千人まで減ってしまった。しかし、社会実験や毎週の商店街のイベントを実施したことによって、実感として人が戻ってきていると感じた。おそらく、なかまち夢通りで 5,6 千人ぐらいまでになってきている。かつてどん底までいったが、努力次第で 1 万人規模の通行量になっていくし、なるように商店街で努力中である。そのためにも、公共施設、例えば、なかまち夢通りに 300 人ぐらいが入る多目的な行政的な施設があれば、必ず人は来る。

○　2007 年問題がある。いろいろな人に聞くと、子育てを終えた女性は今度は自分の親の介護に入ると言う。やっと子育てが終わって街に買い物に行きたいと思っても、介護をしなければならないというわけだ。50～60 代の女性の熱烈な希望は、託児所ならぬ託老所を街なかに作ってくれれば、自分もゆっくり買い物が出来るし、親も喜ぶ。

○　最後に、社会実験は駅前大通りをバスとタクシーだけ通し、さらにスピード制限をした。結果として、音が小さく、歩行者が安心して歩くことが出来た。いつでも街なかは 20ｋｍ以下とか、スピード制限をすべきだ。そうすれば、排気ガスも少なくなり、子供でも高齢者でも安心して街なかを歩くことが出来る。安心なまちづくりという観点からもやってもらいたい。

【コーディネーター】

○　住みよい街の条件として、人々が交流する場が街なかにあるということが専門家からも言われている。ヨーロッパでは広場が都市の装置として機能しているが、日本ではそれに変わるものを考えなければならない。

○　日本の都市計画は機能の純化ということで、街なかから商業、業務機能だけを残して、それ以外を追い出すということを今までやってきた。それを大きく方向転換するのが、今回の法改正の大きな狙いだと思う。あらゆる機能を街なかに戻すというのが、大きなテーマだと思う。

○　それぞれの都市によって何が求められるかということだが、郡山については本日のパネルディスカッションで出た提案が今後のまちづくりのアイディアになると思う。なお、ヨーロッパではゾーン 30 という取組みにより、車と歩行者の共存が

当たり前になってきている。

【福島県】

○　先日、中心市街地の現地視察で青森市、八戸市を視察したが、両市とも郡山の社会実験で実施したキッズサロンのような取組みをすでに行っている。八戸では、個人が経営し、有料だが、０歳～2 歳までの子供の預かりもやっている。そこの園長は、商店街に子供を預ける所がなく、街なかに務める人さえも自分たちの商店街ではなく、郊外で買い物をしているという話を聞いたことが託児所を始めるきっかけだった。

○　園長に、なぜ商店街の人と話をすることになったのか、そのきっかけを尋ねたところ、たまたま親戚に商工会議所の方がいて、困っているという話を聞いたのだということだった。

○　一番大切なことは、必要な時に関係者と話をしたのかということだ。たまたまでもいい、異業種間交流が大切だ。郡山の社会実験で感じたのは、これまで 1 対 1 という関係だけで仕事を進めてきたのではないだろうかということだ。実験を通して、関係者間のネットワークが出来た。このネットワークを今後も活用してほしい。

【コーディネーター】

○　社会実験を通して、いろいろな人とのネットワーク、ノウハウ、活動に関わる楽しさなどが少しずつ出てきたのかなと思う。社会実験が郡山のまちづくりのきっかけになるのではないかと期待する。